

日本保育者養成教育学会 ニュースレター

■第10号■

The Japanese Society for the Study on Hoikusha Education

2025年4月23日発行 編集・発行 日本保育者養成教育学会

〒170-0013 東京都豊島区東池袋 2-39-2-401 (株)ガリレオ学会業務情報化センター内

巻頭言

保育者養成の計画性 —需要と供給の関係をどのように捉えるのか—

日本保育者養成教育学会
会長 石川昭義(仁愛女子短期大学)

当学会の第9回研究大会は、3月1日(土)に鎌倉女子大学・鎌倉女子大学短期大学部を主催校として開催されました。4年ぶりの対面開催ということで、約300人の参加となった会場では、いたるところで「お久しぶり！」の声が聞かれました。ポスター発表での意見交換、時間の合間合間での会話、情報交換会など、対面開催ならではの賑やかな交流を見て、改めて対面開催の良さを実感しました。主催校の教職員と学生スタッフの皆様には「オール鎌倉」のチームワークで運営していただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございます。

さて、近年、保育者不足の現状にどう対応するかが大きな課題となっています。保育者が足りないと言われる背景には、低年齢児の利用増加に伴う保育者の配置、障がいをもつお子さんや気がかりなお子さんへの配置、退職者の補充や産休育休の代替保育者の確保が考えられます。

ただ、今日、いったいどれくらいの保育者が必要なのか、あるいは不足しているのかについては、わかるようで実のところわからないというのが本当ではないかと思っています。というのも、この需給関係を左右する要因があまりにも複雑だからです。たとえば、「子どもの数の減少と保育施設利用率との関係」、「離職・退職者の数」、「気がかりな子どもへの対応」、「養成校

の入学者数と就職率」、「保育士試験の受験者数と合格率」など、これらの変数が複雑に絡み合っていて、保育者の需給関係は決まってきます。

園によっては、法令の配置基準を上回る職員数でゆとりのある保育を行い、保育の質の向上をめざすという園もあり、こうなると保育者の「不足」というより「要望」に近くなって、需要は高まる一方です。

さほど苦労しなくても保育系の入学者がたくさん集まり、大量の退職者に対して大量の新卒者を供給していた時代はとっくの昔に終わっています。今日、保育者の安定した確保のためには、①新卒保育者の採用、②潜在保育者の掘り起こし、③離職の防止の3つが予定調和的にかみ合わなければなりません。保育者養成校が関わるのは、①の保育者を世に送り出すことですが、②と③の状況次第では、保育職を希望しても入れないという事態が理屈の上では起こりえます。

地元学生中心の養成校もあれば、全国各地から集まる学生の養成校もあります。自治体によっては、UI ターンの保育者に就職奨励金を出すところもあり、卒業後、地元に戻って就職するか、地元を離れて就職するかも需給関係の要因になりうるでしょう。今後、「こども誰でも通園制度」が始まり、保育者の配置基準の見直しが行われるとすれば、さらにこれらの要因は複雑になるに違いありません。

限られた数の新卒者を自治体間、あるいは公私立間で取り合う事態が生じる懸念がぬぐえない中、「わかるようで実のところわからない」需給関係を少しでも明確にする必要があります。そのためには、保育者の養成において、地域ごとの綿密な計画性または見通しが必要で、その根拠となる数字を出すための調査も必要になります。誰(どこ)を対象として、どのような方法で調べるのがいいのか？会員の皆様の関係する地域で試行的に取り組んでいただくのはどうでしょうか。それらの調査事例を参考にさせていただきながら、学会として今後の保育者養成の対応を国に提案することができればと考えています。

第9回 研究大会を終えて

第9回研究大会

実行委員長 小泉裕子(鎌倉女子大学・鎌倉女子大学短期大学部)

日本保育者養成教育学会第9回大会は、4年ぶりとなる対面学会として計画し、鎌倉女子大学・鎌倉女子大学短期大学部に於いて、令和7年3月1日(土)に、盛会のうち無事終了しましたことをご報告致します。

コロナ禍以降、オンライン学会が定着する中で、対面学会の開催に意欲を示されていたのは、本学会長の石川昭義先生をはじめとする役員の皆様たちでありました。全国にいる沢山の学会員の皆様の期待に応えるべく、リアル・コミュニケーションの醍醐味を実感できる対面学会を目指して、大会校としてその準備を進めて参りました。

おかげさまで当日は、会員271名、非会員18名の合計289名の参加者が集結し、久しぶりの対面学会の賑わいが戻って参りました。

本大会では、保育職に関する近年の低迷する社会状況を払拭するべく、「養成」、「育成」に直接関わる当事者である学会員同士、これからの展望について熱く語り合える契機となればという切実な思いを持ち、テーマとして『「保育職の社会的認知を高める未来戦略」～VUCAの時代に生きる保育者像の創出～』を掲げました。

基調講演Ⅰには、鎌倉市教育委員会教育長である高橋洋平氏、また基調講演Ⅱには、和洋女子大学教授で全国保育士養成協議会常務理事の矢藤誠慈郎氏によるご講演を賜りました。お二人のご講演に熱心に耳を傾けた参加者からは、演者の熱いメッセージに酔いしれる興奮と熱気が感じられ、拍手が鳴り止まぬほどの反響ある講演会場となりました。

午後のポスター開場では279件が発表されました。発表者と質問者が至近距離で語り合い、笑顔溢れる挨拶、白熱した議論が繰り広げられたコミュニケーションで「懐かしい学会らしさ」の実感できる場となっております。

開場の運営等では、至らない点もあったかと存じますが、大会テーマの趣旨を反映した当事者たちの繋がりを実感して戴けたら幸いです。

第9回大会の実現には、大会の運営を当初よりサポートして下さった大会運営事務局(名鉄観光サービス株式会社 仙台支店)の皆様、運営プランを計画し準備を進めて下さった実行委員21名の先生方、事前及び当日の会場設営や案内等を担った19名の学生ボランティア達、後方支援をして下さった学会役員の皆様方のご協力・ご支援の賜でございます。あらためまして、ここに深く感謝申し上げます。

また、当日ご参加下さった学会員の皆様にも、この場を借りてお礼申し上げたいと思います。皆様、第9回大会へのご協力とご支援を賜り、本当に有難うございました。

特集 新しい時代の実習記録を考える

～ICT 記録や新しい様式の活用

近年、実習の形態、記録の様式などについて、多様な形態でなされるようになってきました。それに伴い、実習記録の様式や方法についても、時系列やエピソードのほか、保育ドキュメンテーションや保育環境図などを用いたものなど、様々な様式で行われるようになってきました。また、ICT の活用が進み、養成校においても保育現場においても、実習に活用する事例もふえてきています。

本学会においても、実習について様々な研究や実践報告等があり、養成教育において、議論が活発に行なわれるトピックの1つとなっています。今回、「新しい時代の保育実習の記録について、ICT 化や様式の検討など、養成校と現場の双方から、どう捉えられ、実際にどのように実践されているのかを紹介いただくことで、さらなる研究・研鑽の一助になればと考え、特集記事にしました。

養成校より①

ICT 記録や様式を中心に

上田 よう子(玉川大学)

玉川大学の教育実習(幼稚園)・保育実習(保育所)(以降、実習)は担当者がともに連携し、実習生が子どもの面白さに触れ、自らの心が動くことを大切にできるように指導をしています。実習日誌に関しても書く技術の向上のみを目指すのではなく、子どもへの視点を深めていくことをねらいとしています。

実習日誌の形式は、時系列記録、エピソード記録、ドキュメンテーション型日誌、コーナー型日誌などの形式から、実習園と相談のうえ選択できるようにしています。なお、どの書式も 2 ページを基準とし、エピソード+ドキュメンテーションなど異なる形式を組み合わせることも可能で、手書き・PC 入力を選択できます。

実習日誌は、以前はエピソード記録が中心でしたが、8 年ほど前より、写真を組み込むドキュメンテーション型日誌に取り組む学生が増加し、2024 年度では教育実習(幼稚園)約 60%、保育実習約 71%となりました。

ドキュメンテーション型日誌は、子どもが試行錯誤し探究する姿や楽しむ様子を写真で記録し、そこから子どもが感じていることや学びを深く考察する特徴があり、実習生の心が動いた場面や子どもの姿を可視化できるため、学生と実習園の双方の学びにつながっています。学生からは、「遊びのプロセスが写真で分かるので、書いていて楽しい」「写真を見ながら担当教

論と振り返りをする事で、自分の考えを伝えやすく、先生の視点も理解しやすい」等の意見¹があり、実習園からは「指導が楽しい」「実習生の視点が保育者にとっても学びになる」と非常に好評です。

対話が生まれ、子どもの姿を共有しやすいというメリットは、実習生にとって「先生方に自分の感じた子どもの姿や保育の話聞いてもらえた」という安堵感や、翌日の実習への意欲向上につながっているようです。また、色や形、レイアウトを工夫できるため、子どもの姿を思い出しながらわくわくと日誌を作成できるという利点もあります。

一方で課題の一つとなる写真等の個人情報漏洩対策としては、本校では大学からの貸与または実習園のカメラ等を利用し、実習生が園外に持ち出すことのないようにしています。現在、さらなる充実のための ICT 化を進めており、ドキュメンテーション型日誌が PC やタブレット上で完結する書式とその運用を試行中です。学生の意見を取り入れながら、実習生が保育者への夢に向けて保育の面白さを感じられる実習となる日誌のあり方を模索し続けています。

注1)岩田恵子・大豆生田啓友・鈴木美枝子・田澤里喜・田甫綾野『ドキュメンテーション型実習日誌』の試みと課題』『論叢』玉川大学教育学部紀要 第 19 号,2019 年,pp. 125~140

養成校より②

実習記録の ICT 化は、何をもたらすのか？

尾崎 司(東京家政大学短期大学部保育科)

私が所属する東京家政大学(板橋校舎)では、私たちが開発した電子版実習記録の導入を昨年度から始めた。実習生や実習先からの反応は、すこぶる良好である。この電子記録は、時系列、エピソード、ドキュメンテーションなどに対応し、書類・画像・動画・音声も添付できる。クラウド上で ID とパスワードがあれば端末を問わずアクセスでき、設定されたグループ内のみ閲覧・コメントもできる。電子記録のトップ画面では、各書式や実習用ルーブリックのダウンロードが可能で、動画で使い方やガイダンス内容を繰り返し閲覧し自ら学習できるようになっている。

そして、本学独自の特徴は、私が開発した実習用ルーブリックが搭載されている点である。省察支援ツールであるルーブリック型エピソード記録は、実習担当保育者だけでなく巡回訪問教員も、実習生の状況や学びを即時的に捉えることができる。また、電子記録の着目したい箇所にマーカーを付け、コメントやバッチ(5カテゴリー)を付けることができる。それは後日、テキストマイニングによるキーワード分析や、自己の傾向性を表わすレーダーチャートして表示され、自己理解を深めることができる。電子記録の利点は、こうしたコメントによる即時フィードバックや情報共有、自己省察力の育成にある。

電子記録の研究において、全ての実習を終えた学生が、保育現場のアルバイトで対処に戸惑

った場面について語ってくれた。その学生はある日、アルバイト先の保育園で、以前にも見たことがあり、同じことがあったと想起させる場面に遭遇した。どの実習だったか思い出せなかった。家に帰って過去の実習日誌を引っ張り出しその場面を探した。その記録が見つかり、そこには自分がその時どのようなことを悩み、考え、助言をもらったのかが記録されていた。そこで、この学生はその記録にまつわる記憶を思い出し、次の時に実践に活かした。学生は、私と「検索」の話をする中でこの話を思い出したのである。

このエピソードは、今、困っている状況を解決するために、過去の保育データを実践に活用する「知」のあり方を示唆している。ICT 化が進んでいくと、近い将来、目の前で起きている事象に対応するために、子どもや保育者との過去の関わり、保護者と話した記録データを検索し、それら複数のデータをつなげて考察し実践に活用する時代が、すぐそこに来ている。あるいは、蓄積された保育データを AI で分析し傾向を知ったうえで、保育者としての実践知、暗黙知から実践に活かすことが普通になるのかもしれない。

手書きかデジタル入力かという議論は、瑣末なことではない。私たちは、その保育データを保育実践にどう活用していくのかということに、思いを馳せなければならない。このように、デジタル化時代の保育者が身につける、高度な専門性の一つとして、私は「保育データを読み解き活用する能力」があるのではないかと考えている。私は、この能力を「保育データ・リテラシー」と呼んでいる。

今後、人材が入れ替わり変動する保育業界において、情報の共有、業務の引き継ぎ、実践へのフィードバック、関連する事務の効率化など ICT 化による改善が、ますます求められる時代となる。保育の質向上に向けて、保育者養成校は ICT 化の本質的な理解を促す必要がある。記録の ICT 化は、私たちにそのことを問うている。

-
- ・尾崎司「保育実習で学生は何を学んだか(Ⅱ)」,東京家政大学教員養成推進室年報,第9号,2020年
 - ・尾崎司「現場連携による実習評価ルーブリックの開発(Ⅲ)~実習のためのアセスメント・システムの構築に向けて」,東京家政大学研究紀要,第60集(1),2020年

養成校より③

評価と学びをつなぐ実習記録

杉山実加・嶋田弘子(名古屋短期大学)

本学では、学生の主体的な学びを促すこと、実習先での評価の明確化を課題として、数年前から実習記録の改善に取り組んでいます。これまで、保育実習 I では時系列記録(一日の特定部分を詳細に記録)とエピソード記録を採用してきました。時系列記録は保育の流れや子どもの姿、保育者の援助を把握するのに有効です。しかし、参与観察の状態ですれらを十分に把握することは初めての実習では難しく、自分のことに精一杯で単なる流れの記録になることもあ

計画を實踐した日の記録	
月 日 () 実習クラス (年組)	所属機関(または実習先)の名称
実習を通して得た子どもの理解	
自分の実践の準備・計画、当日の活動の振り返り	
より良い実践とするために必要な課題点・変更点	
実習園の先生からいただいた助言・指導内容	
指導者氏名	指導者所属

図 3

今回の記録は、実習園の実習指導者と実習生の「対話」を目的としています。実習生の記録を対話のツールとして活用し、実習指導者や担任保育士と対話することで、実習生が保育の魅力ややりがいを感じられることを期待しています。

養成校より④

新しい時代の実習記録を考える：ICT 記録や様式を中心に

西川ひろ子(安田女子大学)

保育現場の ICT 化は急速に進行している。保育者養成校はどうであろうか。2023 年度より「保育実習日誌における ICT 活用に関する教育的効果と課題」をテーマに共同研究を取組んできた。当初の調査では数%が日誌をパソコンで作成していたが、この数年で 3 割を超えてパソコンでの日誌作成を実施している。来年度は更に多く、一部の実習のみや学習障害などの発達障害傾向がある学生の使用や、ICT を進めている保育園や幼稚園からの依頼の場合は実施などを含めると 5 割を超す勢いである。

では、なぜ、「手書き」から「パソコン」に変更されるのか。パソコンでの日誌作成に対して慎重であった養成校の理由は、セキュリティへの危惧と手書きによる学習効果、そして ICT を活用できる人材の不足であった。しかし、コロナ禍によって社会は変化した。学生は、個人情報が含まれる日誌においてもパソコンで作成し、オンラインで提出する不安感はないと調査結果から明らかになった。

何故、実習記録における ICT 活用が急増するのか。このことを、先日開催された第 9 回日

本保育者養成養育学会研究大会にて、保育実習生と実習園での実習指導者を調査対象のアンケート結果を発表した。調査結果は、「日誌作成時間の短縮」「誤字脱字の軽減」「記録が手元にあることによる振り返りの容易さ」に高い評価があった。実習学生にとって、時間が短縮したことによる教育的効果は、「体力がもった」が 72.7%、「指導案や教材研究に時間を使えた」が 63.6%である。手元に記録があることによる教育的効果は、「子ども理解が深まった」が 79.5%、「先生の保育の意図が理解できるようになった」が 72.7%である。更に、「PC などで誤字脱字防げた」が 93.5%と圧倒的に高い。

私は、実習から帰ってきた学生の実習記録を概観する際、誤字脱字の修正の多さが気になっていた。学生からの「誤字脱字の防止」を高評価する回答に納得が言った。今後の実習日誌指導は、文字の添削から、保育に関することが中心となることを期待している。

さらにその先は、クラウドを活用した実習記録の提出だろう。このシステムは薬剤師や看護師の実習ではすでに運用に入っている。実習期間中に養成校、実習施設、実習学生が実習記録を通して繋がることは、更なる教育効果の可能性が広がるだろう。

最後の課題は保育者養成校の実習担当者がいかに ICT を使うかであろう。個人情報が含まれる実習記録への慎重な姿勢は保ちながら、新しい時代への人材育成に向かって、養成校同士が連携を深め、時に励まし合い、研究と教育の質を更に高めるチャンスを掴んでいきたい。

養成校より⑤

保育者養成校が行う保育・子育て支援における記録の ICT 化

小原敏郎(共立女子大学)

まず、私自身の実習記録に関する考えは、記録を ICT 化することは、“行う”“行わない”という問題ではなく、“いつ始めるか”という時期の問題と捉えています。実習記録を書く目的が、子どもや保育士等の援助や関わりの理解、記録に基づく省察といった内容であることを考えると、ICT 化は単なる作業のデジタル化以上の意味をもつと考えています。

私が所属する共立女子大学では、学内のプレールームに地域の親子を招き、学生が参加する保育・子育て支援活動を実施し、実践を振り返り、話し合いを継続的に行っています。この学びの中心となるのが、「ストーリーパーク(Storypark)」^{注1}というニュージーランドで開発された記録アプリを用いた振り返りや話し合いといえます。ここでは、私が考える記録の ICT 化の利点を三つ挙げます。

第1に、学生同士の保育の可視化、共有化が進み、子どもの活動の文脈やプロセスが「見える」ようになることです。他の学生が「ストーリーパーク」に書いた記録を読むことで、自分では気づかなかった視点や自分ならこう関わるといった新しい考えに出会うことができます。

第2に、キーワード検索が可能な「ラーニングタグ」という機能を使った振り返りが可能とな

ることです。実際に「嬉しかったこと」「もっと良くしたいこと」「困ったこと」といったタグを用意しています。例えば、学生が自分の記録に「困ったこと」というタグをつけることで、それらのエピソードだけを抽出し、「安心してスタッフとコミュニケーションをとれるにはどうすればよいか」「自分の遊びへのこだわりが強く、すべてを否定しないように関わりたい」といった具体的なテーマについて学生同士の話し合いがなされました。

第3に、記録が蓄積されることで、子どもの成長や学生自らの成長の軌跡を振り返ることが可能になっています。ICT 化することで過去の記録に簡単にアクセスできるため、以前の子どもの姿やその時の自分の考え方や関わり方を踏まえ、どのような変化・成長が見られるかを客観的に把握することができるようになっていきます。

このように、記録の ICT 化は、単に業務の効率化を目的とするのではなく、活動の学びをより深めるための有効な手段であると感じています。今後、保育の現場において、子ども一人ひとりへの理解を深め、保育の質の向上につなげるためにも、ICT を活用した記録の普及に向けた取り組みを進めていきたいと考えています。

注1:本文において「ストーリーパーク(Storypark)」という固有名を使用していますが、開示すべき利益相反関連事項はありません。

保育現場より①

実習に生かす ICT の活用

亀山秀郎(認定こども園七松幼稚園)

私は副園長だった頃から、養成校で実習指導を兼任して様々な取組を行った(1)。その中で、実習記録だけは実習期間中の寝不足の一因となるだけでなく、実習担当保育者との協議の中で、課題点やそれを解決するような対話の成果物になりにくいと感じていた。

そこで本園では、PEMQ(Photo Evaluation Method of Quality:保育環境の質を写真によって評価していく方法)を実習記録に用いた(2)。手順としては、①保育終了後に、その日のねらいや、課題に感じた当日の撮影場所を考える(近年はノンコンタクトタイムとして実習記録作成も OK に)②その時の保育環境を再現して園所有カメラで撮影③園所有プリンターで印刷④写真をもとに実習担当保育者と振り返り⑤写真を実習記録末尾に添付してそこに振り返り内容を記述、といった流れである。この振り返りを毎日続けることで、実習生が、写真をもとに環境構成の方法、関わり方等、翌日に向けて具体的な方法を生み出し、保育の多様性について記述された。(3)本実践の特徴は、リーダー保育者のマネジメントで成り立っている。(4)本園では、実習記録を PC 等での入力を推奨している。実習生は、うれしいようだが、養成校

が、実習記録のデータ様式を提供していないことや、「手書き同調圧力」で実行者が少ないことが課題である。今後は、個人情報に留意して、タブレット端末や、スマートフォンでの作成に移行していくことが望まれる。その際には、環境構成図について写真等を用いて、子どもにとって望ましい保育環境を実習担当者との対話によって生み出されることが期待される。

この他本園では、責任実習の様子をタブレットで録画して振り返ることや、園での事前実習オリエンテーションとして動画を視聴してもらうことは、実習生にとって視覚的に分かりやすい。このような ICT 化の取組については、兵庫県や大阪府の私立幼稚園団体が作成している実習ガイドラインを各都道府県の園団体と養成校が協力して作る中で、盛り込むことが望まれる。

実習に生かす ICT 活用は、これからもトップリーダーの判断による部分が大きい。なお、私が 2001 年母園での実習の時に、PC で全て実習記録を作成させて頂いた。園児だった頃の私を知る園長は「もうそういう時代ですね」と快諾して頂いたことを今でも感謝している。

*参考文献

- 1) 亀山秀郎 編著「保育所・幼稚園・幼保連携型認定こども園実習 (MINERVA はじめて学ぶ保育;10)」,pp100-103,ミネルヴァ書房,2018
- 2) 秋田喜代美監修・編著他「秋田喜代美の写真で語る保育の環境づくり」,ひかりのくに,2016
- 3) 亀山秀郎他「認定こども園における実習生が撮影した写真の実習記録への活用」,『幼年教育 WEB ジャーナル(2)』,pp34-41,2019
- 4) 亀山秀郎他「保育現場は園内研修とマネジメントで変わる!」,ひかりのくに,2025

保育現場より②

新しい時代の実習記録を考える:記録(ICT)・様式

古場宏子(北九州市福祉事業団 あじさい保育所)

○実習記録の様式についての現状

保育実習 I に関しては、初めての实習なので、まず時系列で記入することが望ましいと考えます。保育所の一日の流れ、子どもの活動、環境構成、保育士の援や配慮事項、実習生の動きなどを記録することで、大まかな保育所の生活や子どもの様子が分かりやすいからです。現在、北九州市にある養成校では、記録内容・書式はほぼ同じとなっており、手書きによる時系列での記入をしています(手書きで同じ内容を毎日記入することは大変では?という懸念もあります)。

また、養成校によっては、依頼時に「手書きによる作成を原則としているが、実習施設が認める場合においてパソコンによる日誌等の書類作成を認める。パソコン使用の許諾について

お知らせください」とありますが、これまで実習生がパソコンを使用しての記録はありません。これに対しては、「パソコンを持ってるのが大変」、「パソコンを置くのに場所をとるため邪魔にもなるのでは?」、「そもそも、家の印刷機が壊れて使用不可」、「実習時間中に手書きで記入ができたため」など、学生側の理由もうかがえます。

一方実習Ⅱでは、子どもを見る視点や思いを読み取ることも必要になってくるため、指定の様式(上記の様式・方法)では書きにくいのではないかと感じています(*福岡市にはドキュメンテーションで記録している養成校もある。当保育所では受け入れたことがないため詳細は不明)。

○保育所での現状

保育現場の記録は、次のように、パソコンや手書き、アプリなどを織り交ぜて行っています。

≪帳票≫パソコンと手書きのハイブリッド

- ① 月間指導計画はパソコンで記入。評価反省は手書き。
- ② 週案は1週目まではパソコン。それ以降の週案は付け足していく。日誌の実践の記録はパソコンで記入。
- ③ 3歳以上児は、クラスノートの文章を日誌用に多少書き換えて、日誌の記録とする。
→ICT化とまでは言えないが重複する部分はパソコン入力。入力が難しい所は手書き



3日分の日誌



ハイブリッド書式の週案

≪保護者との連携≫

- ①きつずノートアプリで1歳から5歳児まで連絡帳機能を使用。
(0歳児は生活の様子を細かく伝えたいので紙ベース。)
- ◎保護者への連絡はみんな共通の内容はコピペ、そのあと、個別の様子を入力するので手書きに比べると随分時間短縮。

○新しい時代の実習記録を考える

実習生にはまず、保育所とはどういうところか知ってもらい、子どもと関わり保育士の援助を見て学ぶと同時に、実際に子どもと関わることで保育に携わる喜びを感じ、保育の道に進みたいと希望を持ってほしいと思っています。実習では実際に現場で働くための基礎や学生のうちに身につけておきたい保育技術や、作っておきたい教材などを知り、学校に戻ってから実習で学んだことを生かして学校生活を送ってほしいと考えます。そのためには、細やかな記録が役立つからです。まず、どんな様式であろうと、その視点をもって記録をとることが大切です。

保育現場での ICT 化は園によって差があるため、実習中に(就職した時に役立つため)慣れておいた方がいいということはないと考えます。実習のねらいによって既存の様式の方が分かりやすいと思いますが、記録を書くことが楽しいものとなってほしいと思います(楽しいまできなくてもせめて苦手感、苦痛とならないように)。

理想的には、実習でのクラス配置にもよりますが、例えば同じクラスへの配属が 2 日あるなら、1 日目は時系列で保育所の一日の流れ、子どもの活動、環境構成、保育士の援や配慮事項、実習生の動きなど記録し、2 日目は、可能なら心が動いた場面を写真で撮り、ドキュメンテーションを作るという様式にするとよいと考えます。そして、それを基に翌日にカンファレンスを行い保育士と共に振り返りを行います。この時、担任だけでなく他のクラスの保育士も可能であれば参加すると1対1より話しやすいと思います(保育士の負担にならない程度に)。

これらを実現するためには、「学校がそれ専用のアプリを実習生にインストールしてもらう(できれば時系列用、ドキュメンテーション用 2 種類あれば…)」、「アプリで写真を取り込みその場面について考察する」、「実習園では子どもの写真使用の許可をとる」、「印刷の問題」(家庭でできるのがベストですが、できない時は、保育所で印刷可能では?)。

これにより、「記録時間の短縮、負担減」、「写真を撮ることで、実習生も意識を高く実習に臨むことができる」、「その後の振り返りを行うことで実習生と保育士の対話が生まれ、気づきがお互いに出てくる」効果が期待されるため、特に、若い保育士にとっても学びにもつながると考えられます。しかし、アプリ…と考えてはみましたが、すぐに実現することが難しいことは想像できます。そのため、まずは手書きからでもいいので、実習期間中、同じ様式ではなく、ドキュメンテーション等を用いて記録することで、子どもの姿をわくわくしながら思い出し、子どもの気持ちや自分の関りを考え、さらに対話により振り返りができれば、より実りある実習になると考えます。

日本保育者養成教育学会 広報委員会

○石井章仁(大妻女子大学) 上田敏文(名古屋市立大学) 遠藤純子(昭和女子大学)
小久保圭一郎(倉敷市立短期大学) 櫻井裕介((西南女学院大学短期大学部)